

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：32643

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580065

研究課題名(和文)英国20世紀前半の児童文学における女兒表象研究

研究課題名(英文)A Study on Girl's Representations during the Early Twentieth Century Britain

研究代表者

松永 典子 (MATSUNAGA, Noriko)

帝京大学・理工学部・講師

研究者番号：00579807

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の目的は、女たちが抱える問題が、政治的権利を獲得した今なお残り、そのためフェミニズム視点の重要性は変わらず認識されているにもかかわらず、一般市民にその意義が十分に浸透しないように思える理由を、フェミニズムの系譜学の観点から分析することにある。二〇世紀前半を第一波フェミニズム世代からポストサフラジスト世代として理解し、また「女兒」を発展段階にある存在として広義に捉え、二〇世紀前半の古典的演劇作品および大衆文学における「女兒」表象を考察し、世代継承の変遷を分析するとともに、その実現の可能性を示唆した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study is to analyse the reasons the contemporary feminism and feminist movements seem "obsolete" despite the fact that the feminist issues are much discussed and the importance of its issues are acknowledged generally. In order to analyse the seemingly illogical situations (in the sense that the female power is necessary, while feminism is not wanted), the study examines the young girl representations in both canonical dramas and popular fictions of the early twentieth century Britain. In so doing, it tried to trace the genealogy of feminism and understand the dilemma the contemporary feminism faces.

研究分野：英語圏文学

 キーワード：フェミニズム 英文学 ポストサフラジズム Joan of Arc Bernard Shaw Irene Rathbone Evadne P
rice

1. 研究開始当初の背景

政治的にも経済的にも文学的にも、昨今の女児および若年女性表象への注目は著しい。他方、そうした流行に反するかのように、たとえば二〇〇〇年代には「ジェンダー・フリー・パッシング」現象等が散見された。女性固有の貧困等の問題が山積みしたままである今日の現状を考えると、フェミニズムの課題が解決されたとはいいがたい。その運動/理論に対する期待が失われているとも言えない。事実、女性をめぐる議論が絶えたこともない。そうであるにも関わらず、その運動/理論の世代継承が困難に見える言説が後を絶たないのはなぜか。

他方、フェミニズム運動においては、「波」という比喻が、その伝統の長さを示すために用いられてきた。そうした名称が、第一波フェミニズム(一九二〇年代の参政権運動をその代表的運動とされる)であり、第二波フェミニズム(一九六〇年代後半から七〇年代をピークとする、いわゆるウーマン・リブ)である。これらに対して、現代のフェミニズムの状況は(批評家によって異なるが)「ポストフェミニズム」と呼ばれる。その言葉が指し示すのは、目標がすべて達成されたのだから、もはやフェミニズムの有用性は終わった、である。さらに具体的に言いかえるならば、現代を第二波フェミニズムが終わった時代とする見方である。同様に考えるならば、第一波フェミニズムの後の時代は、参政権が達成された後の時代すなわち「ポストサフラジズム」と呼ぶことができるだろう。

ポストフェミニズムによってフェミニズムの「波」が絶えたと時期尚早に断言する前に、まずは二〇世紀の二つのフェミニズム(第一波、第二波)の後の時代(ポストサフラジズム、ポストフェミニズム)の共通点を見るべきだろう。二一世紀におけるポストフェミニズムと二〇世紀前半のポストサフラジストの共通点は、どちらも大きなムーブメントの後の喪失感を抱えている点にある。第一波がその喪失感を持つに至った理由がなにか。その喪失感を越えて第二波にどのように結実するのか。これまでのフェミニズム研究の成果が示しているのは、二一世紀における女同士の絆(シスターフッド)はときに失敗した、もしくは失敗に見えたとしても、つねに継続されてきたことである。失敗もしくは中断に思える言説がどのように形成され、それがどのような効果を現代のフェミニズム運動に与えたのか。

以上のような問題意識のうえに、世代を超えた女たちの連帯の伝統と可能性を考察するべく、本研究課題においては、第一波フェミニズムの後の世代、第二波フェミニズムの後の世代、という二つの世代に注目した。

また、第一波、ポストサフラジスト、第二波、ポストフェミニズムというようにフェミニズムを系譜学的に捉えると、二〇世紀前半

の女性表象、とくに若年女性表象の重要性が前景化される。なぜならば、「後(ポスト)」の世代とは、みずからの世代の課題を考えると同時に、ムーブメントのピーク時の世代の苦難や価値観をとくに共有、ときに反発しながら、みずからの新たな課題を見極めることが求められる世代だからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、女たちが抱える社会的文化的経済的問題が政治的権利を獲得した今なお残り、そのためフェミニズム視点の重要性は変わらず認識されているにもかかわらず、一般市民にその意義が十分に浸透しないようにおもえる理由を系譜学の観点から探ることにある。そのため女同士の絆の変遷を、古典的文学および大衆文学に描かれた「女児」を中心に考察した。

本研究においては、世代継承の観点から次世代としての女児表象に注目するが、ここでの女児とは、若年女性を意味するだけでなく、世代から世代へ移行する存在、世代と世代をつなぐ存在として解釈した。女児という概念を年齢だけでなく、理念上、広義に捉えることによって、二〇世紀初頭における女性像をより多義的に捉えられると考えた。

また、幅広いムーブメントが求められるフェミニズムの分野では、古典だけでなく大衆作品における表象を重視し、分析対象は、古典的作品(ジョージ・バーナード・ショー)だけではなく、大衆的作品(エヴァドネ・ブライス、イレヌ・ラスボーン)の両者とした。

3. 研究の方法

研究方法としては、以下の三つの方法をとった。

(1) エビデンスの収集

文学作品に描かれた女児表象を考察するため、作品発表当時の定期刊行物の記録を資料収集のうえ分析し、歴史的実証性をもたせた研究をおこなうため、一時資料の収集を、おもに英国図書館にておこなった。また文献だけでなく、視覚資料をもとめて帝国戦争博物館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館にてそれぞれ資料収集をおこなった。

(2) 作品分析

いわゆる大衆文学に位置づけられる作品を分析対象としたが、そうした作品の位置づけをおこなうために正典的テクストと比較するとともに、理論的枠組み(おもにフェミニズムおよびカルチュラル・スタディーズ)に基づいて精密に分析することを心がけた。

(3) 研究者仲間との交流/援助

学会において研究発表をおこなうとともに、定期的に研究会および読書会に参加し、研究成果の発表前に同分野の研究者からの意見・批判を求めた。そのうえで成果発表をおこなった。

4. 研究成果

本研究課題において得られた主たる成果は、以下のとおりである。

- (1) 「ポスト」世代としての戦間期小説とチック・リットの系譜学：第一波フェミニズムの後（ポストサフラジスト）世代と第二波フェミニズムの後、いわゆる「ポストフェミニスト」世代は、ともにビッグウェーブの後の、いわば「遅れてきた」フェミニズム世代という共有点をもつ。これら二つの世代の「ポスト」世代の連続性を探究することによって、今日におけるフェミニズムの可能性（第三波フェミニズム）の提示を試みた。ポストフェミニスト世代の小説といわれるチック・リットのプロトタイプとして、第一次世界大戦を戦間期に描いたエヴァドネ・プライスの小説『そんなに静かではない・・・』を分析し、第一波から第二波への継承を提示することによって、第二波から第三波への継承の可能性を示唆した。
- (2) フェミニスト・メランコリー：現代のフェミニズム運動／理論が存在しているにもかかわらず分断されているかのように思える問題を、精神分析における喪の概念を踏まえて、孤独の観点から考察した。具体的には、国家と女の関係に注目し、英国二〇世紀初頭のG・B・ショーの『聖ジョーン』の孤独に戦う若年女性表象を、ナショナリズムだけでなくセクシュアリティを經由して分析し、本作が描く親族関係の前提にどのような性の力学が潜んでいるのか、またそれが二〇世紀初頭および今日における意味を指摘した。
- (3) 女兒／若年女性の労働：言語による女性の社会階層移動を描いたことで知られるバーナード・ショーの戯曲『ピグマリオン』を労働の観点から分析することによって、二〇世紀における若年女性にとっての労働問題の重要性を明らかにした。
- (4) 中産階級女性にとっての労働：職業としての看護婦の歴史的形成を、軍事および医療の二つの流れがあることを指摘し、その両者を例に第一波フェミニズムが盛んとなった二〇世紀初頭における看護女性表象にあらわれる対立言説を考察した。これによって明らかになったのは、ポストサフラジスト時代の英国中産

階級女性たちは働く主体としての自己形成を（意識的にせよ無意識にせよ）おこなっていたことである。

本研究課題で知見を得た成果については、本課題の研究分野である英文学系の学術会議にて発表するとともに、教育研究および中東研究のシンポジウムにおいても口頭発表する機会を得た。これによって、成果の一部を学術上だけでなく、教育という形で社会に還元することができたと考えている。

上記に述べた研究成果はすべて、科学研究費助成金なくしては達成することはできなかった。このような機会を与えていただいたことを心から感謝している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計7件)

松永典子, Owen Jones, *Chavs: The Demonization of the Working Class--社会運動を阻害するモノ*, *New Perspective*, 査読無, 45 巻 2 号, 2015, 71-73.

松永典子, 越智博美・河野真太郎編著『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」--一格差, 文化, イスラーム』, ヴァージニア・ウルフ研究, 査読無, 32 号, 2015, 31-135.

Noriko Matsunaga, *Becoming an English Teacher: Universalism, Education, and in Money in Bernard Shaw's Pygmalion*, 帝京大学研究年報人文編, 査読有, 20 号, 2014, 105-119.

松永典子, チック・リットとしての"ポスト"サフラジスト小説--エヴァドネ・プライス『そんなに静かではない・・・』におけるシスターフッド・労働・自伝, ヴァージニア・ウルフ研究, 査読有, 31 号, 2014, 15-37.

松永典子, 大理奈穂子・栗田隆子・大野左紀子著水月昭道監修『高学歴女子の貧困』(光文社新書, 2014年)一学ぶ/悩む女たち, *New Perspective*, 査読無, 45 巻 1 号, 2014, 55-57.

松永典子, ジャンヌ・ダルクの主張--バーナード・ショー『聖ジョーン』にみる親族関係, ヴァージニア・ウルフ研究, 査読有, 30 号, 2013, 27-44.

Noriko Matsunaga, *It Seems Strange That the Sisters Should Be My Enemies*":

The Nursing Representations before and during the Great War, 帝京大学研究年報人文編, 査読有, 19号, 2013, 143-153.

〔学会発表〕(計2件)

松永典子, エジプト映画『678』のフェミニズム的考察, シンポジウム「アジアを知る—エジプト映画『678』から」, 日本・アジアに関する教育研究ネットワークおよび中東映画研究会, 2016年1月25日, 東京大学本郷キャンパス(東京都文京区).

松永典子, 英国大戦間期の女の職業選択と主体構築, 日本ヴァージニア・ウルフ協会第33回全国大会ワーク・イン・プログラム, 2013年11月10日, 成蹊大学(東京都武蔵野市).

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等: 該当事項なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松永 典子 (MATSUNAGA, Noriko)
帝京大学・理工学部・講師
研究者番号: 00579807

(2) 研究分担者

なし()

研究者番号:

(3) 連携研究者

なし()

研究者番号: